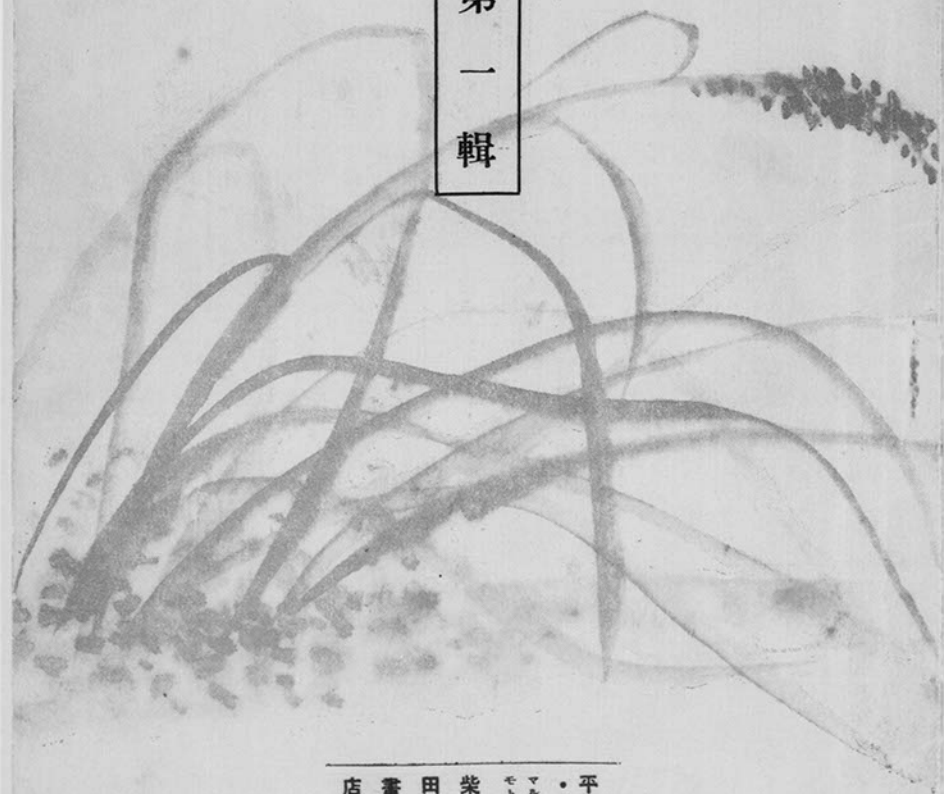
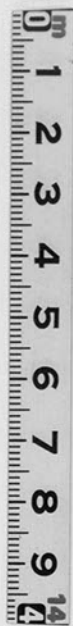


呈 聖 奏

第一輯



平・柴田書店



野

麥

第一輯



野 麥 第一輯 目 次

表 紙

中 西 一 路

郷土文化について

片寄 歌二

俳 句

金澤 千保

榮 椿 檀子

大和田 水明

金成 上鶴

村瀬 露草

渡邊 武門

武石 光聖

下山田 消至

石橋 柴子

民 謡

高瀬 勝男

短 歌

小濱 牧泉

新妻 久満夫

戸部 曙歌

松村 清

吉田 儼

柏木 哲

野本 多霞夫

佐々木 顯

美崎 一郎

高木 愛二

小山田 滋

城 芝 鳴

野本 多霞夫

野 麥 萌ゆ

野本 多霞夫

廣告圖案

綿引 富郎

座

—のられわ

代 誌 入 同

石川 武夫
片寄 歌二
高瀬 勝男
出 席
中野 勇雄
松村 清
佐々木 顯
島田 春雄

わが愛する歌

十五氏

萩原 隆子・多霞夫・光二

萩原 隆子・多霞夫・光二

萩原 隆子・多霞夫・光二

萩原 隆子・多霞夫・光二

萩原 隆子・多霞夫・光二

萩原 隆子・多霞夫・光二

萩原 隆子・多霞夫・光二

萩原 隆子・多霞夫・光二

萩原 隆子・多霞夫・光二

萩原 隆子・多霞夫・光二

萩原 隆子・多霞夫・光二

萩原 隆子・多霞夫・光二

萩原 隆子・多霞夫・光二

萩原 隆子・多霞夫・光二

萩原 隆子・多霞夫・光二

萩原 隆子・多霞夫・光二

萩原 隆子・多霞夫・光二

萩原 隆子・多霞夫・光二

萩原 隆子・多霞夫・光二

萩原 隆子・多霞夫・光二

萩原 隆子・多霞夫・光二

萩原 隆子・多霞夫・光二

萩原 隆子・多霞夫・光二

萩原 隆子・多霞夫・光二

萩原 隆子・多霞夫・光二

萩原 隆子・多霞夫・光二

萩原 隆子・多霞夫・光二

萩原 隆子・多霞夫・光二

萩原 隆子・多霞夫・光二

萩原 隆子・多霞夫・光二

萩原 隆子・多霞夫・光二

萩原 隆子・多霞夫・光二

萩原 隆子・多霞夫・光二

萩原 隆子・多霞夫・光二

郷土文化について

片 寄 歌 二

文學作品のヴァリエターといふことから、ちかごろ、地方的なものへの関心がすくなくからず喚びおこされてゐる。殊に、藤澤桓夫の「大阪」が問題になつてから「文學の地方性」といふ言葉がそこそこにながれるやうになつたが、たしかに今までの文學は中央偏重に過ぎてゐて、作品の素材がまったく單調化してきたと言はれてゐるのである。そこで、こんどは地方的なものへ新しい視野を拓いていつて、文學がアンニユイの危地に墮ちるのを防ぎたいとする人々の一群が出てきたのであるが、これは、私たち地方人の立場からいつても、なんとなく心づよい感じがしてうれしきことなのである。

もちろん、地方には地方のローカルカラーがあつて、田舎には田舎の人生々々が営まれてゐるのであるゆゑにそのローカルカラーなり人生々々活なりが、はつきり文學的な表現をされることは、單に「文學の地方性」といふ觀點からばかりでなく、私たち地方人としても亦、切

實な興味ある問題であらうと思ふのである。

殊に、私たちの周囲には、いはゆる農山漁村についてみても、或はまた郷土の政治経済の根幹である炭礦地帯についてみても、地方的なもの、郷土的なものは、まだまだ未知数のまゝ埋れてゐるにちがひないのである。文學的な立場から、それを一つ一つと上げていつて、新しい意欲のもとに作品されることは、私たちとしても眞に望ましいことなのであるが、或は、それも強ち遠い日のことではないやうに思はれる。

かつて、自然主義運動がさかんであつた頃、郷土文學の必要が熱心に唱へられて、二三の人々は、その作品の上にも明らかに實踐してゐたのであるが、しかし、それは主として自然や情景の描寫にのみとゞまつてゐたに過ぎなかつた。つまりテクニクの巧さはあつても、それは單に表現のみとらはれてゐるに過ぎなくて、地方の習俗をばしてその性格的なニュアンスまで掘んだ鋭さがなかつたやうに思ふのである。田山花袋の「田舎教師」や島崎藤村の「破戒」を讀んでみて、私たちの切實感がまだ浅いやうに感ずるのは、何かこういふ點に基因するものがあるのだからうかと思ふのである。

それからまた、プロレタリア文學當時の農民文學にし

ても、藏原惟人の有名な指導的論文があつたので、すぐれた作品や作家で心にのこるものは遂に出なかつたと言つていいと思ふ。これはつまり、單なるイデオロギーの強化によつてのみ農民の心理や感情や生活を表現せんとしたため失敗にちがひないのであるが、農民に親しきをもつて讀まれない作品がとうてい農民文學と言へないのももちろんである。それは、農村との絶えざる交流を身に體してはじめて深い觀察がなされ理解がもたれて、傳統と習俗に因はれた農民たちの哀れな姿に心づくのであらうと思ふ。この點からいつて、鎌山博史の「平野の記録」が一脈新鮮な空氣を喚びおこし、和田傳の隨筆集「村落裸記」が興味をもつて讀まれてゐるのもそこに何らかの示唆が與へられてゐるのでなからうか。

○
ひるがへつて、今、私たち地方人に與へられた課題は地方文化の検討であり、批判である。

私たちは、あらためて私たちの郷土の文化的方面について検討する必要に迫られてゐるのではないかと思ふ。私たちの周囲にもたらされた文化上の諸問題については、從來、あまりに無批判であつて、或るものに至つては無耻でさへあつたやうに思ふのである。正しい批判があつて、はじめて正しい文化が確保されるのであるが、郷土

文化に對する意識的な批判が今までは殆んど缺如してゐたと言つていいと思ふのである。文學作品が地方的なものへ觸手を伸ばしてくる前に、私たちは先づ第一にこの一事を痛感せざるを得なかつたのである。

それにしても、私たちの周囲には、文化的な集團なり施設なり、或はまた郷土研究なりが、まだまだ足りない現状である。それは人的要素の貧困といふ點もあるが、一般に文化のレベルが低いといふより外ないのである。これを教育方面についてみても、郷土教育が一應なされてゐるものゝ、積極的に郷土研究の教室を持つてゐるのは女學校だけであつて、多くは未だ無關心の態度である。一方また十三日會が今では殆んど文化的意義を失つた存在となつてからは、文化的な集團として挙げ得るものは定に寥々たるものである。若い人たちの平廣告研究會は或る意味において文化團體の一つと言ひ得るかも知れないが、その眼目とするところは寧ろ經濟經濟の研究であつて、いさゝかアカデミックの感がないでもない。

私たちは、郷土の文化的な方面に接觸を持つてゐる人々が、一歩進んで探究的な批判的な立場から行動されることを望んでやまない。そしてまた、新しい郷土文學が願くは郷土人の手によつて出發されて欲しいと思ふのである。これは私たちの切實な希望なのである。

花石斑魚

渡邊何鳴

花うぐひ山かけ蒼き瀬につける
花うぐひ峽のみなせをたのしめる
漆松の花粉の黄にながれ
松の花静臥の窓をながれつぐ
榛の木の花粉けぶらす風湧きぬ

うぐひす

鈴木欣々子

うぐひすの朝は麥生の野より來ぬ
ひばり鳴く麥生のにほひ窓にくる
なつかしの丘にさぼしき土筆萌ゆ
土筆萌えなつかしの野の徑ふりぬ
土筆野の想ひはとほき汝を想ひり

春の灯

金澤千保

金髪に春の灯のうるみたれ
人形の瞳は吾に春灯
春の灯に人形の瞳夢もつや
海棠のみなゆれてゐる夕かな
春晝や潮のことき街の音

雲雀野

樂梅楨子

揚雲雀麥生はなびきつゝひかり
麥の畝雲雀ひそかに歩みゐる
初蛙いつか雨やみ星出でぬ
初蛙水田は月のうすあかり
春川のひかり麥生と野をわかつ

養蠶期 明智金鈴子

蠶のいとま子らが獲てきし雑魚焼けり
蠶のいとま子ら獲し雑魚の串けづる
蠶はせわし子らに雑魚焼く炬火おこす
蠶疲れの睡をよぶ炬火に雑魚焼きぬ
蠶に疲れ子ら獲し雑魚に夕餉せる

春光麗 大和田水明

麗かや穴を出てたる蟹眠る
街の灯の光りうるみて春の曉
杭影の淡き水田や春淺し
杉苗ににぶき陽光や春めける
畦崩す蹄の跡や下萌ゆる

木の芽 金成上鶴

経塚のそれとも判かずあしび咲く
麥を踏む海風抑さゆ小松山
春曉のものみな白め噴火灰降り
雨の宮寂けし木の芽ほぐれぬる
臍路む裾を過ぎける風温くし

春日抄 九里秋岳

木の芽晴つゞく山畑拓きぬる
穀割りし木の芽に雨は明るうて
うかれ猫晝をうとく眠りぬる
種浸す水こぼくと泡生めり
日を吸ふてぬくとき土よ草を摘む

花 木 瓜 村 瀬 露 草

鶯の啼きては首をかしげけり
沈丁の香に想出の日記焼く
花木瓜に働き蜜を見守りぬ
蜜蜂の花粉をつけて戻りけり
松の花黄色き風を起しけり

沈 丁 花 渡 邊 武 門

沈丁の匂ひ來部屋に絶ゆるいのち
今は亡き老のいのちよ沈丁花
御佛に捧ぐ丁字の花を剪る
丁字の香よそに憂ひの人住めり
沈丁に看護り疲れのいゆるなし

春 曉 深 瀬 みのり

春曉の炭車はうすき蒸氣立てり
春曉の炭車は黒き光となる
畦焼の暮るゝに貨車が鑛山に入る
花漬が湯に浮きいろをうしなはず
花漬が熱湯に浮いてゐる薄き紅

雑 詠 下 山 田 涓 至

人住ます久しき庭や秋の草
たそがれて應なき戸や落椿
見えがくれ春の潮漕く小舟かな
春水に鍋洗ふ主婦をたづねけり
大堰たかぶる音や春の水

浅 春 譜 武 石 光 聖

舟の着く磧ばかりが陽炎ふて
早春や雨の中なる御裸像
春曉や餌皿を鳴らす籠の鳥
ものゝ芽に春曉の露つぶらなる
山畑の静けさ雲雀鳴くばかり

春のかざはな 石 橋 紫 子

さんらんと風花捲けり路樹の日に
地均車がうなり風花日に捲ける
ひとら往き日の風花にぬれるなく
警報櫓風花捲けど照らひ聳ち
風花の雲あをぞらをおわず飛び

野 麥 座 談 會

—の ら れ わ
代 時 誌 雜 人 同

(順ハロイ) 者 席 出

石 川 武 夫	片 寄 耿 二	高 瀬 勝 男	中 野 勇 雄	松 村 清 顯	佐 々 木 春 雄	島 田 春 雄
---------	---------	---------	---------	---------	-----------	---------

○山村暮鳥氏時代
同人 今晩はお忙がしいところを有難うございまして。この地方に於ける山村暮鳥氏以後の時増遷史といふやうなものを、同人雑誌を中心としてお話ししたいと思います。松村さんの司會で始めて頂きます。
松村 古いところは、はつきり判りませんが、あやしげな記憶をたどつてやることにしましょう。先づ「オアシス」以前のことを佐々木さんから一つ、何か話して下さい。
佐々木 ……

松村 暮鳥さんが居られた時代には、「風景」と「群衆へ」とが出てますが、これはどつちが先だつたのです？
佐々木 その頃では「風景」が先だつたと憶えています。「風景」から「群衆へ」にいつたんでしたね。
中野 それから「セントブリズム」ついでふのがあつたんでないですか。
佐々木 「セントブリズム」ついでいふのもあつたね。だが、「風景」の後だつたです。
中野 一體、暮鳥さんが此處に居たのは何年位だつたんです？

佐々木 サア、かなり長くなることはあるんですが、六、七年ふたんでなからうか。聖公會堂の牧師として、平は暮鳥さんとしても長くゐた方だつたんでね。(註、大正元年より七年一月まで在住の由、後日佐々木氏から來信あり)
島田 私は「風景」の三號が大正三年八月に出されたのを見てきたんですが……
松村 それは暮鳥さんの最初の雑誌だね。
中野 「風景」つて、どんな雑誌でした？
佐々木 あれは體裁なんかはかなり宜かつたですね。用紙なんか厚くて……
高瀬 そう。體裁のいい雑誌だつた。表紙なんか青い色を使つて、木枯に立つ樹かなんか描いてあつたんでないかい。
(そうだ、といふ聲)
中野 「群衆へ」には、今の花園謙二や死んだ齋藤千枝など歌を書いてるが、花園はその頃やつぱりクリスチャンで、暮鳥さんと知りあつたんですか。
佐々木 花園はクリスチャンではなかつたと思ふね。大變子供好きな人で、教會では、よく歌劇なんかやつたものだつた。然し、暮鳥さんには餘程厄介になつた人で、花園が詩

あの紙なんだよ。

(一座笑)

島田 「播種者」はその追悼號でお仕舞ひでしたね。

中野 そうだったね。そしてこの後がとてゝも泥濘するんだから——。

(一座笑)

(この間、所謂タラシテラ事件についての談話賑やか。筆記なか／＼及ばず)

○「詩の會」前後

高瀬 タラシテラで暫く中絶してゐたが、僕たちの文藝的情熱から何かと欲しいと思つて始まつたのが「路傍詩」なんだ。

松村 「路傍詩」は大正十三年頃だつたらう。勇ちゃんもその時分「リラ」を出したんぢやなかつたか——。

島田 いや、「路傍詩」と同じく出たのは



「乾杯群」でしたらう。

松村 然し「路傍詩」は大きかつたね。詩の展覧會などを平陽女學校の教會だのやつたりしたのが……。

島田 「路傍詩」と「乾杯群」と「RRR」が出て、これらの人々で詩の會を造つて春木亭に集つたんでしたね。

高瀬 その詩の會つていふ名前は、暮鳥さんがゐた頃にも暮鳥さんが中心となつて春木亭に集つてゐたのを詩の會と言つてました、と今の春木亭のお内儀さんが言つてゐた。

中野 とに角詩の會は大きな仕事をしてゐた。今の葉山嘉樹、山田清三郎、金子洋文、藏原惟人、小堀甚二等を呼んで講演會をやつたのも詩の會の仕事だつたね。

松村 そうだ。寒いわだつたな。

高瀬 詩の朗讀を商業學校でやつたり。

島田 それは小林直人さんも生きてゐた頃で、聴衆は五人位しかなかつたですね。

(一座笑)

中野 「ラッパ」つていふのが長瀬勝美、佐藤政美等でやつたが、あれは一寸いゝ難題だつたんでないかな。

高瀬 うん、そしてあれは少し續いたんで

なかつたかい

中野 昭和二年の二月には「詩南車」が出て、あと、六月には「笑」が出てゐるが

——。

島田 「詩南車」の始まりは「だぢやれ」といふんでなかつたですか。

片寄 そうでした。

高瀬 やつぱりその頃「香車」といふのを赤井にゐた高瀬久由さんが出してゐたが、あれは五六號づつゝいたんだつたす。

島田 「笑」は二號でやめた。

高瀬 (片寄氏へ) あんた達で講演會をやつたのは、あれはいつだつたか。

片寄 さア、いつだつたかな。

松村 そうすると、こゝでは先づ詩の會が多くの問題を投げかけてゐることになるんだが、そのメンバーは誰々なんです。



萩原たけ子夫人を

たねづつ 石橋 柴子
野本 霞夫
鈴木 光二

——こゝは、萩原さんの應接室——

アームチェアやのすばらしいクッションにどつかとシットダウンしたるワレラスリーメン(どうデス!! 言葉からして改まつたでせう?)瓦斯ストーブのグリーパーいふ音がメヅらしくて、多岐夫がさつそく

吾れガストーブの前にありにき

と詠んで、上の句を考へてゐるうち

「ホ、い、い、みなさん、おそろひで——。

お待たせいたしました」

といふすき透るやうな聲に、三人、はッ!とばかり我にかへつた。(尤も、この歌は、吾れ赤彦の前にありにき、といふやうめいなお方の眞似なることが、あとになつて解つた)

「實は、けふは、インディーブルーといふことで、お伺ひ、したんですが——」

島田 これだけあるんです。高瀬勝男、妻木泰治、大浦弘四郎、猪狩清直、高橋久由、故中野大次郎、松村清、三野混池、石川武夫、草野心平、中野勇雄、故松本純一、猪狩一馬、横田卓造、故五十嵐節郎、故小林直人、島田春雄といふところだ。

松村 そうすると、この人達でこゝとは愈々「無軌道」になるわけなんだが、あれは昭和三年の三月に創刊號が出てゐるね。

島田 その編輯は松村さんがやつてゐる。松村 私もあれには困つたよ。とに角雑誌は出すことになつたんだが、どんな譯で私に廻つてきたのか知らないが、引受けてみたものゝ實に困つたんだ。それで二號には吉野さんへ渡してしまつた。

島田 うん。あれは「無軌道」が出る時には七ちゃん(松本純一)が編輯者になるわけだつたんだが、七ちゃんと勝ちゃん(高瀬)とが喧嘩してしまつたので、その編輯が松村さんに代つたんでしたね。

高瀬 まあそういふわけなんだが、その喧嘩の原因といふのは、松本が「詩南車」へ書いたのが發端なんだ。つまり俺たちの雑誌があるのに、何故「詩南車」なんかへ書いたんだ——といふことにあるんだ。

片寄 松本さんは私んどこへも遊びに来て



るたので、「詩南車」の原稿も貰つたことがあつたかも知れない。

島田 僕と七ちゃんとして、片寄君のところへ原稿を届つたのを覚えてゐるよ。

片寄 そんなこともありましたね。

松村 松本純一が死んだので、詩の會の適當な指導者がなくなつてしまつたので、「無軌道」も自然解消となつたわけだが——。

島田 「無軌道」は二號で終つて、その後

はまた中絶といふことになるが——。

松村 その

の間、ずつと續いてゐたのが詩南社一派なんだよ。

中野 「詩南車」は何

號まで續き

ました? 片寄 三

十號までで

す。中野 そ

一匙の海

長瀬欣愛

夕暮の海は一房の葡萄です
青い虚無の三角符が輝き出すと
海水が濁れてしまふ。
白い螺旋階段が無限に延びて行く。
第一天國には阿片の白い煙があります。
逆説の娘が住まぬ海は授業の時間割です。
白銀の章魚は海の女王です。
黄色の月のある夜は眞珠を捨て、貝殻を耳にする。
黒板の上の哀傷符です。

白晝の海は客器の中の青い嘔吐物です。
病院の白い咳壺は隠れて捨てられてしまつた
太陽が僕を低脳にする。
海に開いた楕圓形の窓に倚つて
僕はラムネの玉を呑んで反芻する。

五月哀鳴

永崎四郎

山査子は五月の花と聞く。
——山査子は五月の花と聞く。

平和

佐分利 晃

五月の花よ
野路ほのか
白くうすれて
あさはかと
薫れる如く
幼な日の想ひ出深し
吾が愛しき
かの君なくて
丘の邊を
獨りさすらふ
山査子の
花散りは匂ひ
はすかにも残る日忙びし
とどろく雷夕立の雨
軒をめぐる雨だれ
昔は次第に遠のいて空に虹見ゆ
宮詣る足音に鳩は軒より
平和の翼を羽ばたき飛んでくる
いとしままざしは幼な兒の豆を持つ手にそ
ゝがれる
罪なき鳩の足本に轉り落ちる豆一つ

春の約束

湯木陽之助

丘にも 野にも 瀬々らぎにも
また 仰ぎ見る大空にも
冬の記憶すてになく
季節の循環は起點に戻る
淡い霞のカーテンを引けば
ほのぼのと陽炎の背景の彼方
金持のいとも幸福のお嬢さんのやうに
みごもれる春の顔

誰ぞ知る花の咲く理由

燎亂と輝く
櫻のシャンデリの下で
たゞわけもなく
私は財布をたゞいてゐる。

青空

松本一夫

空は青い
氣も青い
空は輝く
私の希望に輝く
鳥が鳴く
私の心も鳴る青空に呼びかけて
波が砂濱を洗ふ
私の心も若い血潮で洗はれる
砂濱には赤い貝殻が残つた
海のプレセントだ
私の心には意氣と熱がこつた
若さのプレセントだ。

はまなす

青柳由美子

はまなす！ なんて赤い花だ
汝は薊でその身をつゝいてゐる
北海の荒磯にかくも美しく、そして雄々しく
咲く花
お前を憶ふ時私の心は憶ひ出で一杯だ
はまなす！ なんて赤い花だ
ほこらしげに咲く花けれどお前は淋しさうだ
何か物足りなさを訴へてゐるかのやうに、香
のみ漂ふ
さびなみはお前と共に語り共に唄ふ
月のない暗い夜、でもお前はほのかに香つて
ゐるだらう

柴子おそろおそろ申上げる。

「まあ、そんなとんでもない。なんにもお聞きにならないで、そつと、そつと、しておいで下さいまし」

實に、あざやかな！ ヲレヲ三人、とりつくひまもなかりけりである。

「毎日、やつぱりお忙がしいでせう」

「え、何や彼やと家事にはかり道はれておりまして、夜分やすむのなんか十二時頃になつてしまふのでございます」

「朝は……？」

「五時半になると起きるのでございます」

お、なんとの睡眠時間。それでよくこの楚々としたお氣が保つものだと思心する。

「い、え、習慣で、なんともございせん」と、實に、はつきりしたお答へ。誰デス！

失禮なことを質問してはいけませんゾ。

「わたし、小學の五年頃、祖父が發句といふのをやつておりまして、喜の字のお祝ひの時に句會など聞いたのを憶えてゐるのでございます。その時、お集りになつた皆さんが、短歌など書いてゐるのを見て、なん



だか子供心に羨ましいやうに思つたんでございまして。蔵の中つゞらの中にも朱で添削されたのが一杯入つてゐるのを見たことがございまして。どうしたら歌が作れるのか、どうしたら東京の先生に見てもらへるのか、と祖父に聞いたりしたんでございますから……」
幼少時代を偲ぶ夫人の瞳に、窓ガラスを透して淺春の空が蒼い。
「女學校の頃は、只今のやうに校友會誌などで短句や俳句を載せるやうなことがございましてしたけれど、わたしの伯父で、中學校の國漢の先生がおり、その人がその方面に興味があつたので、まあ影響をうけたといふわけでございますね」
「その頃の歌へでどなたか私淑なされた方は……」
「いえ、その頃は私淑した人なんて別になか

野 麥 萌 ゆ

野 本 多 霞 夫

こんな片々たる田舎の同人雑誌ではあるが、私たちは、これでも新らしい熱意をもつて創めたのである。もちろん「野麥」は、文藝——のうちのでも、詩と短歌と、俳句とが基調になるものであつて、郷土の文藝人の楽しきわが家でありたいと思つてゐる。

今までも、私たちの身邊には、やつぱりこんな文藝同人雑誌のやうなものが、十指にあまるほど、生れたりつづれたりしてきた。私たち自身からしてその苦い體驗をもつてゐるのである。今更、大きなことは言へないし、言はない方が亦、いゝのであらう。

然しながら、私たちは、なんと言つても微力である。今後、この仕事をつゞけてゆくには、どうしても各方面

のいろんな人たちの理解ある御援助と御協力を願はねばならないことなのであるから、多少私たちの意圖するところを述べておきたいと思ふ。

○ 私たちは、それぞれ立場も主張も傾向も、めいめい異つてゐる者ばかりである。然し、一旦「野麥」によつて友誼を結んでからは、期するところは、地方文化の向上といふ點にあるのである。したがつて、地方文化の問題について、今後、私たちによつてとりあげるものが多からうと思ふ。

もちろん、文學、美術、音楽、舞踊映画といふやうな藝術一般のそれぞれについて興味をもつてゐられる人たちもあらうと思ふが、これらの人たちも

「野麥」は欣んで迎へたいと思ふ。只私たちは、なるべく無用の鬭争を避けたい。郷土人のあつまりは、あくまで和氣霽々裡に終始したいのが念願である。

○ 野麥社の組織については、同人中心であることはもちろんであるが、この他に、私たちの仕事に理解の眼をもつて接してくれる人たちがあつて違ひない。これらの人たちが澤山あればある程、私たちは、力づよいのである。

そして、それらの人たちが朗らかに手を携へて、すゝんでゆきたいと思ふ。「野麥」は饑で、疲れ切つた郷土人の胸奥に、新鮮な野趣のやうなものをおくりこんでゆくだらうと思ふ。それは、私たちにとつて一番たのしいことなのである。詩歌を愛する人、句作に遊ぶ人たちがばかりでなく、私たちは、郷土の文化人全體のために、有意義な仕事を貼したいと思ふからである。

○ それから、「野麥」が最も力をいれたいと思ふのは、郷土の文化的な方面に對する探究と批判である。私たちの周圍には、まだまだ拓かれるべき視野があるだらうと思ふ。それには新らしい文献も見出されなければならないし、それに就いての研究もなされなければならないのである。

同時に、私たちは批判的な態度をとることも必要であらうと思ふ。從來の文化的な仕事にして、かなり無批判的な、そしてまた無智なことが平然となされてゐたことは、郷土の心ある人士にとつて少なからず遺憾とされてゐる筈である。

とにかく、私たちのなすべきことは多々あるやうな気がする。あへて大方の御賛同を得て、私たちは、全身に奔流する情熱をかたむけて、「野麥」をまもり育て、ゆきたいと思つてゐる。

つたんです、現代の歌人でも、わたしが不勉強で、改造社の短歌研究を見てゐる位が圖の山ですから、私淑などいふまでにはいかないのでございます」

「スポークでは何がお好きですか？ 趣味として、短歌は別物ですが……」

「わたし、女學校時代に、テニスをしたのでございますの」

これは、初耳だ。このお姿で、長い紫紺の袴なんか白鉢巻でテニスコートに立ちにげんそのかみのたけ子チヤンの風爽たるスタイルな、みなさん、お想像下さい。

「まあ、選手と言へば選手でせうが、女學生がテニスなどやりますのは、その頃はほんとにモダンと言ひませうか、お轉變と言ひませうか、ホ、ハ、ハ、」

と、一瞬、女學生のやうな若い聲でお笑ひになつたデス。

「でも、今ではもうラケットの握り方も忘れてしまつて、たゞ、趣味としてはやつぱり讀書でございます。何でも讀んであれば、それで宜しいんです。濫讀といふんでございませう。音楽では、邦樂よりも洋樂の

方が好きでしてシューベルトの未完成なんか、こんどは一度に三つも出てしまつたやうでございます。あれなんかいつ聴いても私は大好きなんです」

「映畫はいかゞですか」

「この通り、もう聞かないのですから、すつかり御無沙汰してしまつて……」

昨年、神経痛になられてから、朝の散歩をなさらないことになつたそうで、今年は新川畔や谷川瀬田間に奥さんの姿を見られなくなつてしまつた。

「野麥社の客員として、又は同人として、御推薦なさる女性はないでせうか」

「そうでございます。皆さんもう御結婚なすつてしまつたさうで、田部さんなんかまだ頑張つて頂くやうでしたらよかつたんですが——。庄司さんも井尻さんも、御結婚後は矢張りなさつてゐないんでせうね」

この邊で、ワレラは質問の鋒をおさめ再びすき透るやうな聲に送られてマイキヤクした。

(三月下旬のある一日)

春日

高瀬勝男

A

どこかで笛を吹いて居る
やはらかな空気が
したしたと 臭ふんだ
いま 私は
杳然として笛の音をきき
にほひに酔ふて
春の大氣を胸深く吸うてゐる
じいつと
目を据えて一點
そこには ニンフ達の踊が
たまらなく 私を魅惑する
私は決して孤獨でない

蜜蜂の詩

B

のびのびと春の野にでて
大氣のにほひをかぐんだ
むつちりした乳房の感觸
此處には起伏する丘陵がある
飛べよ 蜜蜂
爽やかに はばたけ
霞の彼方
私の影像が追憶とともにある
戀は重く石臼に似たものであつても
飛べよ 蜜蜂
爽やかに はばたけ

馬

市 (民謡)

小濱牧泉

賣るため育てて
來たげんなあ ホイ
賣るため馴らして
來たげんなあ ホイ
わーれのためがみ
つや／＼と ホイ
わーれのいふなき
たかだかと ホト
くつはとり／＼
泣けるぞよ ホイ
わーれは買はれて
行くだぞよ ホイ
大晦日
やりくりするもの
やりくりし

細々ながら
正月の
支度も出来た
大晦日
貸しもなければ
借りもない
貧乏暮しの
氣安さは
のんびり坐る
膳の前
妻の笑顔に
聴きながら
晩酌一本
追加して
窓から眺めた
丸い月

わが愛誦する歌

回答十五氏

○ 故熊谷企見子

いつよりか入相の鐘はなりつらむ心づきたる
はてのひとこゑ 大隈吉道
われはここに神はいづに在すらん月のまた
たき寂しき夜なり 柳原輝子

○ 草野 みどり

夏浅み朝草刈りの童らが素足にからむ大胡麻
の花 北原白秋
生きも死にも天のまにまにと平らけく思ひた
りしは常の時なりき 長塚節

○ 松村 清

山坂をあえぎのぼりておぎろなしまかげをす
れば海が見えたり 柿沼一好

あきらめてわが住む家のほの暗き窓をあくれ
ば四五尺の空 柿沼一好

○ 野村 幸子

冬山にたてる煙ぞなつかしきひとすじ澄める
むらさきにして 若山牧水
おのおの親の腹毛にくぐり入るひよこの
聲の心安げなる 島木赤彦

○ 戸部 曙歌

うごきゆく空に失ひし遠つ峰まなかひたかく
皺かき垂れぬ 岡山巖
山水を受けてめぐれる水くるま白梅咲ける溪
にきらへる 矢吹正衛

○ 美崎 一郎

高山も低山もなき地の果は見る目の前に天し
垂れたり 伊藤左千夫
白堊の瓶こそよけれ霧ながら朝はつめたき水
くみにけり 長塚節

○ 柏木 哲

快き街の戦慄雨側に並べる柳雨に濡れゆく
森花葉

土の香集

秋 山 清 美

ゆらゆらと波うつ麦のしげみより雲雀と思ふ鳥一つとぶ
街路樹の芽立ちよろしも午後の陽を浴びつつ下駄の齒入れ屋をりぬ

○ 三 枝 史 郎

うがひしつゝあはげる空の高みにぞ今日忙びしさの雲はとけゆく
鳥の聲障子より洩るゝ日曜の朝寝しづかに春を味はふ

雨はれの朝の道を吾がゆけば土のしめりの春の香のする
病癒えて口髭生えし師は時に髭に手をやりて忙びしく笑ひぬ

青 柳 山 美 子

なだらかに牛臥す山のまなびやに夢みし世にて友よなげくな
無二の友君一人よと思ひしに會へば語れぬ心わびしき
泪のみほゝに傳ふる刹那こそ静かに澄める湖の秋

佐 藤 敏 美

壯途につく雄々しき君の姿にひそかなる別れひとりちかひし
伯父を見舞ひていつしか三日病室の窓のさくらのふくらみを見る

鈴 木 二 三 夫

山肌の陽のうらゝかさ今日ことに真青くみゆる露の蓋かな
山腹に出でし露の苔摘みれば木を伐る音のしづかに聞こゆ
花瓶の彼岸櫻の一枝よりいささか春のうごめきを見る
流行の春のショールのうち連れてゆく野の道に揚げ雲雀なく

春の夢集

安 藤 紫 幹

燈が遠く重なり浮ぶ臆哉
行きづりの徑は夕焼竹の秋
木連や山肌そよそ夕の風
雨に暮れ人待つ門の柳かな
夕暮れの水に日のある楊かな

竹 香

冬枯の野へ聲おとす鳥哉
いつ迄も一人焚火にあたりけり
洗場に溜る芥や冬の川
浅春の水やゝぬるむ日ざしかな
春蘭に夢多くして春寒し

永 崎 四 嗣

聖堂の壁あたゝかに濠ねるむ
折鶴とねころび遊ぶ春日かな
すかんばや昔思ひて齒にあてる
梅一本古跡の春を語りけり

荻 野 久 良

野は暮れて梅に餘寒の月冴ゆる
まだ寒き社の庭や梅の花

夕雲は水に沈みて洞庭の湖畔寂しく暮の鐘鳴る
岩松汀秋

○ 田中賢介

くむ酒の一滴二滴草にやり山の遊びをさびし
みにけり 山崎等
煤色の雀を友に炭礦の社宅住ひも一年経にけり
小山田滋

○ 高久晩霞

物言はぬ四方のけだものすらだにも哀れなる
かなや親の手を思ふ 源實朝
秋の露まづいち早く耳に入るかゝる性もつ悲
しむべかり 石川啄木

○ 佐々木 顯

ますらを冠のかけ緒結び垂れ弓矢手挟み立
出にけり 愚庵和尚
大海の磯もとろに寄する波われて碎けてさ
けて散るかも 源實朝

○ 高木 愛二

足引の山河の瀧の鳴るなべに弓月が獄に雲立
ちわたる 柿本人麻呂

同人すいひつ

無題 美崎一郎

野木といふ調導があつた。彼は胸を病んで
回春園に入院した。そこで千崎といふ大工さ
んと同室になつた。彼は今時珍らしい全くの
文盲だつた。療養の傍、假名位讀める様にし
てやりたいと野木氏は思ひ立つた。これは本
人も希望し他の同居者も非常に賛成した。先
づ尋常一年のハタから始まつた。二、三ヶ月
後彼は完全に假名を覚え込みぼつと漢字
にはいつて行つた。始めて見る文字の世界、
それは全く驚歎の外なかつた。彼の讀書力は
長足に進歩して行つた。そこで彼は大佛次郎
の長篇『照る日くもる日』を手にした。如何
程面白かつたものか療養上禁斷の消燈後も、
そつと燈をつけて讀み耽つた。それは恐らし
いことだつた。彼の病氣は悪化の一方を辿つ
た。そして讀み終つて間もなく彼の一生を終
りを告げた。この事實を知つた川井園長は復
雜な表情を浮べて長太息をもらした。

若いお母さん 大越 洋

時予さんがこんどお母さんになつた。時予
さん、などといひだすと少々をかしいが、庄
司時予さんのことで、正しくは佐藤時予さん
である。野麥創刊號にも「わが愛する歌」
の欄の中に顔出しをしてゐるはずだし、さう
でなくとも、野麥の關係者になら知つてゐる
人がいくらかあるだらうと思ふ。——とにか
く時予さんが赤ちゃんを産んだのである。實
はけふ、もし時予さんに會へたら、いい歌を
一生懸命つくるやうにいふつもりで訪ねたの
であるが、生れて十日目の赤ちゃんの側に可
なり面やつれして横たはつてゐる時予さん
をみたら、そんな氣持ちは、いつべんにふつ
とんでしまつた。若いお母さんは、更に、慣
れない動作で赤ちゃんに乳首をふくませたり
小さい頭に頬をすりつけたたりして、ときどき
僕をほろりとさせた。時予さんの、そんな恰
好をみると、あの人たちの結婚が非常にむず
かしいものだっただけに、歌なんかどんなに
すばらしいものをつくるより、はるかに感
銘深いものがあるのだ。時予さんだちの「ゆ
きちゃん」が、早く大きくなるやうに。

緑色のノート 石橋 柴子

長唄ふあの巻 白木 英尾

書架を片附けたが私は一冊の緑色のノ
ートに手をやつた。女文字で「私の文集」と書
かれたこのノートを見る毎に、私は胸にのこ
つてゐる種痘の痕をみるやうな、不氣味な思
ひ出を反芻するのであつた。
それは私が商業の五年生の秋、子親の「赤
蜻蛉筑波に雲もなかりけり」を思はせるやう
な好天氣のある一日、クラスのKと街はづれ
の路を歩いてゐた。すると突然、ばら／＼と
簾簾から数人の女學生が現れて、あつといふ
間に私達二人をぐるりと取巻いてしまつた。
一瞬、私は呆氣にとられてしまつたが、Kは
鋭く「逃げろ」と叫んで駆け出した。後を追
つて私も夢中で駆け出した。その時、私の網
膜をかすめたのは、着物も袴も持ち物も、緑
の色の色でかためた一人の女學生であつた。
後日、Kは私へ一冊の緑色のノートを渡し
て「あづかつてゐて呉れ」と、悲痛な聲を残
して家出してしまつた。私は、はじめて緑色
の女學生とKとノートの謎が解けたやうな氣
がしたのであつた。

六四郎のレコードは越後獅子と鶴龜と、一
枚もの、松の緑を持つてゐるだけだが、私は
この人の三味がたまらなく好きで、和風
のレコードでは、五三郎の三味が、ながれて
ゐるのでもしうくない。三味線音楽の良さが
しんみりと解つてうつとりさせられるの
は、やつぱり名人の三味だとおもふ。
いつか、ゆつくりとお三味線を聴きたいも
のですねえと、五十嵐博士の奥さんもお仰言
つてゐたが、お筆のコロリンヤンより、私
は、長唄には厭きがこないとおもふ。宮城道
雄の六段やシメー女史との春の海なんか、
いゝレコードではあるけれど、それよりも私
は「たよりくる……」の都島に、言ひしれぬ深
い親しみをかんずるやうになつた。
さりとて私自身は三味線を習つてみようと思
つたことがない。これも一つのファン心理
であつて、三味線は手にしなくとも、長唄が
好きだといふ人の話を聞くとか大にうれしい
のである。暗己會の人たちとはちかくとし
て、私は、長唄ファンがもつと／＼ゐないか
なあと、折にふれて思つてゐる。

○ 庄司 時子

こほろぎは夙くほろびつと思へりし霜夜の更
になほ離々と鳴く 青柳觀
坑夫等のゴム靴の音かるくゆく磯山谷のうく
ひすのこと 小山田滋

○ 小山田 滋

降るとなく晴るとなくて一日の春はしづか
なり白梅の花 大井廣
白玉の齒にしみとほる秋の夜の酒はしづかに
のむべかりけり 若山牧水

○ 白木 英尾

さみしくて通ひよつた街の灯は氾濫して泣け
ないあかるさだ 井尻寛子
ふつふつと胸底にたぎる愁ひあり夜寒の酒の
身に沁みしこと 丹野八千代

○ 野本多 霞夫

てつびんのふちに枕しねむたげに徳利かたむ
くいざわれもねむ 若山牧水
わが腕に煮られて貝の口わらぬ思ひに沁みて
とる今朝の箸 田部君子

から風

高久 晚霞

國柄は春さり來ればなかなかから風強く寒き日づく
から風が家鳴りどよもす春の夜に遅くを寝ねず風下の街に
風凄き絶え間をひびく夜まわりの拍子木の音は頼もしきかな
むらぎもの心苛ら立つ事しげく薬服ますて疑得ぬ夜寝く
肯立てる思ひ去るとふ酒の香に耐え得ぬおのれ淋しと云はむ
紙芝居高らかに呼べど風を寒み小さき観客たゞ二人立つ
春雨に風稍々出でぬ窓の内にひとり思ひのとりとめもなき
春雨の夜を淋しく居るわれに昔の友のはるけくを來し
幼なくて友と吾が經し貧しさの昔語りもたぬしきものを

青銚の芽

新妻 久満夫

ヒヤシンスの青立ちの芽のやはらかさ見のかなしさに指を觸りけり
銚のごと青芽の立ちをかなしみと日むきに銚をわが置きにけり
なべて芽のつやめき光るまがなしさ日に向けて瞻るそのまさを
部屋に置きて花咲かせむとヒヤシンスの銚のよこれを洗ひおとすも
春の雪重らに降ちて庭土に觸りつつ消ゆる光のともしさ

雜五首

松村 清

。支那水仙

小さきながら花もちひさし朝々の目にはつめたき春知りにけり
かそかなる明りに透きてはり銚の錦魚はあわれ眞夜にうごける
夕づくと雨はみぞれて庭木瓜の花びら重く咲きこごりたる
とほり雨ばらばらすきてしまらくを揺りはゆゆしく糸瓜垂れぬる(舊作二首)
夕雨のひたひた寒き草原のかしこにそこに兵たむろぬる(宮城野原にて)

熊谷企見子君を悼む

柏木 哲

おだやかに眼を閉ざし面さしは佳き歌思ふ在りし日の君(和歌堂と異ちぬ)
言葉なき人は白衣に装へり此世の歎き今ぞきはむる
歌集をも篋に入れて線香の煙りに咽ぶ夫あはれなり
風すさぶ火葬場の夜を人は皆鐵扉の前にただ咽び泣く
こは曾てよき歌詠める君なるかわれ潜々と骨甕を見る

砂埃り

佐々木 顯

吹きすさぶ砂飛ぶさなかを急ぎ行く並木の根そぎ打ち倒れ居る

弔ひの歸り自動車ゆれ走り酔人高く車内に叫ぶも
砂埃り眼もあけぬざり眞向ひてをみなはかなし麥踏み居る

洪水の朝

高木愛二

きぞの雨朝晴れれどなまづ泳ぐ波立つ見せて田も道も水
水出れば道にも田にもなまづ泳ぐさすがにこは鮫川のはた
雀らの聲をあつめて竹やぶの日だまりは朝雫たらしつ
竹やぶも道もよぎりてすさまじく流るるものかこれの氾濫水
おごそかに朝思へば土砂降りの降り繼ぐ雨によべ眼さめたる
水避くと遠まはり來し我が靴の底のしめりは耐ふべきものか
靴底ゆ浸める温氣は冷たけどつつがなく越せば心安けし
陽はいまだささねどすでに光りある氾濫水はやゝ澄みにけり
はだら雪ひだに残して峯も尾もぬくとく照れる布引の山(布引山驛)

山戀ひ

國玉喜輝

旅人の疲れて果ては故郷を想ふに似たる山戀ひごころ
或る時は旅人めける愁ひして山戀ふる人を美しと見ぬ
はかなさを知ればぞなほもこの戀に生くると云はゞ人はあざむや

狂ほしき戀の盲人をさかしらに諭すぞ痴呆の極みなりける
すすり泣くその圓肩のおのきを愛しと見つつ別れけるかな
紅椿お夏が戀の狂亂に打ちふすさまに散りしけるかな
人妻の戀にたとへてさびしさの極みに咲ける紅椿かな

早春のうた抄

白木英尾

癒りたい
癒りたいと
ひとり言する日がつつく
かぼそき手頭を
にぎりてやるも

プラス不正の手を握りつゝ
死をまもり
死をまもりつゝ
一夜明けたり

赤切れの手

その表情の 淨らかさ——
かなしくなりて
ふれたる 唇の
ほのあたゝかさ
カーネーションの花 あかあかと
しづかなり
若きをんなの
死ぬる
——目となる

箱崎半吾

病む吾れに藥すむる母君のあかぎれのみ手いたましきかな
ふれて見れば冷たき手なり母を戀ひて今日いく時を泣きぬしならん
枕邊のふつふつ煮ゆる粥の香にむせびてをりし吾れを知りにき
火箸もてあかぎれ膏をのしてゐるやつれし母のうしろかげはも

山 脈

高 端 巍

川添の竹の一叢さむさむとこがらし吹きて鳥散り飛ぶ
たたなはる山脈と見しくきやかに昨夜の雪にあらはれて見ゆ
白妙に野をも山をも包みたり豊年のしるしとふ雪つもりたり

雑 唱

佐 藤 清 長

その言葉囁めば泌み來るものとなりて忘れ難きにすがりつゝゐる(小山田先生)
曇りをれば月天心に渡れとて光りむさむさ道に明るます
危ふくも堪えて黙せば自からの心餘りて支ふ術なき
かりそめの言葉とばかり忘れ行かむ忘れ行かむと思へあまれり
何一つ目的のなくなる日のありてふらり月夜を街に出て來る
ゆくりなく想ひか湧かむ春の夜は別れい行きし人も戀にき
春四月今日ねむごろにセル羽織着替へて町に人を訪ひ行く

静 岡 の 旅

城 芝 鳴

麓より峯へ幾きだなせる山畑に麥生の波は風光りつゝ
三保まではいや次ぎ／＼に麥畑を見るはさやけしうつり行くまゝ
揚雲雀こゝだ啼きゐて陽炎のかゝようなべに陽は和ぎ満てる
山畑に石垣莓と境して麥生の波は穂に出でにけり
龍華寺のそがひの櫻咲き満てりむれ木芽ぶかう中にまじりて
夏みかん畑の中の逕登りつゝはるかなるかも富士の嶺白し
ネオンの灯夜空明るき静岡の更けてひそけき街をさまよふ
常の世に心ともしく旅行きて吾が悲しみを捨てんとはせし

夏 井 川 溪 谷

戸 部 曙 歌

時雨雲たもてる峽のさむけさに岩むらもみじ燃えしづまりぬ
肌寒く曇りとさせる峽の晝發電機（日立電機所）の音響とどろにひびく
鐵管のふとく光るが目立ちて曇れる峽のもみじしつみぬ
時雨雲晴れゆかむかも明るみて淵瀬のもみじつばらに赤し
をみな子の遊べる溪にかゝる瀧の白々しぶくもみじの中に
つれ立ちて行く眼交に岩山のそゝり立ちつゝ燃ゆるもみじや

極

冬

吉

田

儼

起きぬけの仕事着をきる吾が肌にしびしき冬のかしやくなき冷え
おもふもと雪をかつぎて断崖にうねりを見する冬の萩なり
美しく冬空晴れて梢々はいきづくと見ゆ陽光をはじきつゝ
剥け落ちし土蔵の壁に冬の木の瘦せ果てにける姿ひりつく
遠吠の犬の聲さへ深夜二時疲れ極まる星光を見る

春の青空

野本多霞夫

尾をふりてせきれい一つ静かなる鬼瓦おにがわの上の春の青空
野がすみの匂ひをかぎてゐて久したたりたりと牛車くる音
桃暗く軒端の湯氣に咲きて居り杵音かるく味喰をつきこむ
紅きさす校庭のさくらを語りたる子の落つきをひそかに頼む（女学校試験時）
合格の掲示の上に組かはす櫻の枝のはりきりし紅（試験後）
菜の花をしかとにぎりてねむりゐる乳母車ゆく土堤の春風
木蓮の花ゆらゆらと雨晴れて舗道明るし錢湯にゆく
雨はれて塵一つなき朝空に白木蓮のしづかに燃ゆる
菜の花のひらひらうすき小砂利道彼岸詣りのつらなりてゆく
丘の上の麥の立穂に今朝ことにいざよひきたる還潮の音

佐渡行

美崎

一郎

大船のしりへに起る波のひだ末廣がりに岸打てる見る（新潟川口）
いささかの船酔ひ心地まなかひに揺れては高し佐渡の島山
日蓮が心細しとのたまひし三昧堂は色さびにけり
みささぎの木立の古りにぬかづけば心に浸むる静けさのあり（富野朝隠）

春のころ

小山田滋

竹林に冬の朝日のさしとほるけさむさをわが胸にもちつつ
口にかく貰吸ふ日は言葉さへ胸の奥處おくどに燃えしぶり居り
まわりすみてかすかに音をたてそめし一つの獨樂に心をよせばや
いつしらすつくりし軒の蜂の巢と思ひやるさへ心うるほふ
ミキサーにセメント工事はすみゐるたくましき春の春とはなりぬ
梢の花咲く日となりていくたりか季節坑夫のかへりゆく驛
みる人もなき裏山の梅ながら盛りをいそぐ昨日今日かな
此の朝の麥生の風はふるさとのにほひを吾に吹き送りくる
山藤のうすむらさきの花の色美しきことは子に教ふべき
吹く風にゆらく牡丹の大輪を心ゆたかにみる日となりぬ

野 夢 だ よ り

○「野夢」第一輯を寄稿家並に社友諸氏へお送りいたします。四月下旬創刊といふ筈でしたが、つひ遅れてしまつて相済みません。なんしろ、早急に決まつた話で、同人も社友も纏らないうちに總選舉なんていふことになつてしまつて、内心が氣でなかつたので、どうやらこうやら發行することが出来ました。お約束に背いたことは深くお詫び致しますが右の事情ですから何卒御寛恕下さいたくお願いしたいと思います。

○「野夢」といふ名前は、別に意圖があつて附けたわけではなかつたのですが、何となくいふ名前だと云つてくれる人が多いので安心したやうな氣持しております。最初には口ざはりが一寸きこちなく思つたのですが、呼び馴れてみると言ひ知れぬ親し味を感じられてくるものです。野夢社、野夢編輯部

野夢同人、野夢社友、野夢何々、のむき、Zhang。そして、こんな偶然につけた名前ですが、野夢つて野道のこぼれ夢とばかり思つておりましたところ、更に一つ一つの野夢があることが判つたのです。それは――

○野夢――すゞだけ、水鏡。禾本科、箸(ササ)属の竹類。幹の高さ五六尺、葉は潤大にして先尖り長さ五六寸、稀に小葉に似たる竹米と稱する果實を結び凶歳には山間にては食用とす。本邦東北地方に多く、文簾、花簾、提籠等を作るに用ゆ。――何かの辭典にこんな意味があつたのを見付けたのです。或は御存知の方もあるのせうけれども、ちよつと書きしるしておきたいことだと思つたもので、それから、「野夢」の語源出典などいふ譯でなく茲にお知らせしておくことにいたします。

○編輯は寄つてたかつてやつてみたのですが、詩歌俳句の綜合雑誌の難かしさがつくづく痛感させられました。詩欄が片寄君、短歌欄が野木君、俳句欄が石橋君、座談會と六號記事が鈴木君と云ふ分擔だつたのですが、作品は思ひがけない投稿が随分ありましたので反つて紙数の制限に困つた位でした。然し、郷土の文藝雑誌としてこんなものでいいのだらうか、といふ一脈の不安が私たちの胸に残つております。この一脈の不安が何であるか突きとめてゆくところに今後の私たちの進路があるやうな氣がいたします。

○編輯上の不體裁な點についてはお氣付きの方々は是非御指示をお願いいたします。思ひます。殊に第二輯からは、社内の整備に従つて雑誌の體裁も確然とすることなので、同人や社友の方達ばかりでなく「野夢」に對する希望や批判を有たれるお方は、正しき理解の上に立つて私たちを導いていつて頂きたいと思ひます。(し)

○野夢社の社規や其の他のことは一應編輯部に書面にて問合はせて頂きたい。社内の整備については着々と進めてゐるので、近いうちに確然とした基礎を作りたいと思つてゐる。随つて、第二輯以後には一般の投稿は別に募らないし、亦その必要もなくなると思ふ。客員と同人及び社友の原稿だけで編輯する考へである。

○大體七月末までに、第二輯を出したいと思つてゐる。多数の力作を寄せていただきたい。(孝)

○私の書くところがなくなつてしまつたデス。第二輯からどん／＼書きます。五十嵐博士や中野さんと肩をナラベテね。(光ちゃん)

次號原稿締切 六月末日

野 夢 第 一 輯	
昭和二年五月十五日印刷	昭和二年五月十五日印刷
發行所 東京市豊島區池袋二丁目九番地	發行所 東京市豊島區池袋二丁目九番地
電話 二三四番	電話 二三四番

1 2 3 4 5 6 7 8 10

K, KAMAYA

産科・婦人科

五十嵐 醫院

醫學博士 五十嵐 雄二

平町 新川町
電話 三六九番

新刊・圖書・文具

マルモト柴田書店

電話 124 番 234 番

目科療診

内科、小兒科、婦人科
外科、耳鼻咽喉科
皮膚病、花柳病科
レントゲン科

宅診午前——往診午後

平町田町六十四番地

高久病院

電話 五一三番

渡邊 内科 小兒科 醫院

平町ねづみ坂

電話 161 番

正

中野洋品店

平町二丁目
電話 五三番

昭和十二年五月三十日發行

三猿文庫

一猿子